

「イウス・フェミーネ合唱団」に記者入団

手拍子をつけながらミュージカル音楽を歌うイウス・フェミーネの団員たち。中央は団長の若松美華さん—いずれも北区弓之町の就実なでしこホールで

練習1年、晴れ舞台へ



合唱団を指導する指揮者の高橋昌子さん

ステージでの特別な時間を味わった。女声合唱団「イウス・フェミーネ合唱団」が今月11日、北区で開いたチャリティーコンサートに参加した。高校時代に合唱部員だった私は、約1年にわたり団員と練習を重ねた。コンサートは成功し、私はこんな結論を得た。「本気で頑張る大人は美しい！」。【文・五十嵐朋子、写真・平川義之】

さすが、笑顔を浮かべてゆっくりと私たちを見渡す。ときどきしながら息を吸う。「オイ、スオミ、カツォ……」。パワーと声に包まれて浮かんでいくみたい感覚。「やった！」。失敗続きだったのに、本番で不思議と全員の声が一つになった。

「イウス・フェミーネ合唱団」は2007年に結成。2年に1回開くチャリティーコンサートを目標に、平日の夜に練習している。私は取材で知り、「もう一度合唱してみたい」と入団した。

団員は年齢も職業もさまざま。コンクール上位を目指すような団では

心は一つ 歌い笑い 輝いた



コンサートに参加した五十嵐記者(中央)



約30人の団員がステージに立ったコンサート

見聞録 @

ないが、みんな素直に楽しんでた。大きな声を出せば気分もすっきり。のんびりと楽しんでたが、コンサートが迫ると様子が変わってきた。

「声が暗い」「息継ぎが目立つ」。練習のたびに課題が山積み。当日は、本格的なアカペラ楽曲からミュージカル曲まで16曲を歌うことになった。

土日もゴールデンウィークもなし。私も仕事の合間を縫って練習に駆け

つけた。6曲の暗譜にも泣かされ、宿直勤務中の深夜に楽譜とにらめっこ。ふと、頭をよぎった。「なんで続けているんだろっ……」

団員はほとんどが仕事を抱えている。忙しいはずだが、練習に加えて裏方もこなし、真剣そのものだ。「チャリティーだから」という理由だけだろうか。私の疑問に答えてくれたのは、団長の若松美華さんだった。若松さんは「ハーサルの日、団員の前でこうあいさつした。「輝いている自分を体験したい。みんな、そんな気持ちでやってきたのではないだろうか」

そうかもしれない。就職して4年。仕事に慣れる一方で、なんとなく、視野が広がらないと感じていた。仕事以外で何かを達成してみたいと、挑戦したい自分に気づいた。

本番。1曲目がうまく行ったのは、団員の心が一つになったからかもしれない。課題も残ったものの、成功だった。「笑顔がよかった」「感動した」という反響もいた。 「良かったね」と交わし合う団員の笑顔は達成感にあふれ、少女のように清らかだ。

観客はほぼ満員の約370人。チケットは500枚以上売れた。寄付先である子ども未来・愛ネットワーク▽大学女性協会岡山支部▽岡山少年友の会▽サンフラワー基金▽永瀬清子生家保存会—には、それぞれ15万円以上の寄付を達成した。「頑張ったか良かったな」。そんな満足感を得ている。